

アニメ監督とコラボする

〈ラインの黄金〉

文=田辺とおる

《オペラ劇場あらかわパイロイト》オペラ監督

僕はあまり映画を観ないのですが（ロード・オブ・ザ・リング）の第一作が二〇〇二年に公開されたときは、実家に近い横浜駅西口の映画館に行きました。トールキンの（指輪物語）という原作も、映画についての知識もなかったのだけ、テレビの予告編を観て「なんだかワグナーっぽいなあ」と思ってたのでした。

トールキン原作とワグナーの（ニーベルングの指環）台本が似通っているのは、神話が下敷きだから当然でしょうが、人名やストーリー展開が異なるとはいえ、本当に僕にとっては（指環）そのものの情景で、音楽も（盗作ギリギリじゃないの、と思う程）ワグナー風。映像もまるで（ラインの黄金）のオペラ映画を観ているようでした。独りで出かけたのですが高校の旧友に偶然会い、終演後に一杯誘って「まるでワグナーじゃないか！」と熱弁をふるいました。映画好きには怒られるでしょうが、（指環）のパロディーにしか見えなかったのです（音楽は（マイスタージンガー）や（ローエングリン）等、いろいろ想起させますが）。

でも、もつとショックだったのが、観客層とその熱狂ぶりです。「同工異曲の後発作品の癖に、なんでこんなにウケるんだ！」と憤慨しました。「音楽なんか、オリジナル（と敢えて言う・）の方が余程素晴らしいのに！」とも。

地球の裏側の昔の伝説で、荒唐無稽な御伽噺で、ややこしい話で、というものは、作品に馴染むためにはマイナス要因だと思ひこんでいたのですが、専門家でもマニアでもなさそうな（ロード）の観客は、ファンタジーとして素直に受け入れたのです。

もともとヴィジュアルでは、オペラは映画に太刀打ちできません。最近はおペラもイケメンと美女揃いになりましたが、世界的映画俳優には叶わぬでしょうし、二十列目からおペラグラスで眺める舞台は、縦横無尽にCG技術を駆使した映像効果を巨大スクリーンで観る迫力とは勝負できない。しかも世界中の興行をあてこんだ宣伝もできない。オペラのテレビコマーシャル

なんてヨーロッパの一流劇場でも滅多にやりませんから。同じと言えば外国語に字幕という点ですが、言葉の滑らかさも映画に軍配があるかもしれません。つまり、何と云うのか、観客のノセ方ではオペラは地味なものです。

しかも、（指環）は長い。映画も長いものは長いけど（神々の黄昏）みたいに、休憩含めて六時間となると、これは長い。オペラが音楽ファンやマニア以外に人気を博すのは、なかなか高いハードルです。とはいえ（ロード）が、同じネタなのに易々とオペラの数倍の話題を浚っていくのを目の当たりにして、実に業腹でありました。

しかし暫く思索すると「リングのネタはこんなにウケるんだ。ワグナー作品はやはり凄い」と御氣楽に思えてきました。爾来、一般の人がイメージするようなファンタジー世界の一つとしてのリング、という概念が僕の頭に宿りました。

それが、実現します！アニメ制作会社の雄、ガイナックス社の御協力を得て、アニメ演出家で同社社長山賀博之さんに演出を御願ひし、話題の男性コンテナーリダンダンス、コンドルズの皆さんにイメージパフォーマンスを展開してもらいながら、今回の（ラインの黄金）の舞台は進行します。

宣伝文などに頼りないのですが、僕にも、どうなることやら想像がつかないのです。でも、絶対融合できるはずの異分野交流だと確信しています。今、見えているのは舞台模型だけです。でも、直径五メートルを超えるリングが舞台中央で、オケピットの真上まで張り出します。それがスクリーンとして様々な映像を映し出し、字幕もそこに流れるのです。オペラ演出の枠を超えたヴィジュアルが出現するはずだと、僕は今、胸を膨らませています。

山賀さんと知り合ったのは（ロード）を観た翌年。当時僕はドイツでオペラ歌手をやっていたのですが、日本人らしい活動がしたいと思い、

日本の歌をドイツ語訳した楽譜を出版して即売コンサートをやっていました。それに最も興味を示してくれたのがドイツのアニメ・漫画ファンたち（同時に熱狂的な日本ファンでもあるのです）。彼らの招きで、コスプレヤーがわんさと居るアニメ祭りのゲスト公演をするようになり、入場者の一万人というカッセルの（Comich）に毎年出演したのです。（新世紀エヴァンゲリオン）を持つガイナックス社も、その常連でした。もともとミリタリー等を通じて、日本のアニメ人はドイツ最良が多いのです。

夜更けには冷え込む九月のカッセルで、呑んで語るうちに湧き出たアイデアでした。乗り気になった山賀さんが別の町の（ラインの黄金）公演を観に行き、楽譜を買ってから五年。演出のためにドイツ語を勉強し始めて三年。それが、結実します。

いつもの《あらかわパイロイト》を支えてくれるTIAAファイルも、指揮のハンマー氏、佐々木氏も、すっかりワグナーに馴染んでくれた多くの常連歌手も、ドイツから帰国してワグナーの主役に初挑戦する気鋭の若手や、先日の東京国際声楽コンクール入選で知り合った新人たちも、そして安定感抜群のスタッフたちも、みな揃いました。期待してください。



■ たなべとおる

ドイツの「北ハルツ劇場」専属歌手としてオペラからミュージカルまで出演した後、ベルリンで俳優業にも活動を広げる。映画「ラストサムライ」他では渡辺謙の声を吹き替え（独・仏・西語）・ドラマ・CM・ベルリン・シェークスピアカンパニー「十二夜」などに出演。2000年以降は日本のオペラ出演も多く、2009年にドイツオペラを定期公演する《オペラ劇場あらかわパイロイト》を創設し、歌手兼監督として率いる他、東京国際声楽コンクール事務局・審査員として若手の育成にも尽力。またNHK音楽番組からバラエティーまでテレビ出演も多い他、雑誌連載や楽譜編集でも健筆を揮う。名古屋芸術大学客員教授、国立音楽大学講師。東京二期会会員。www.tanabe.de